

児童サービス論の現在的な課題

——「読み聞かせ」生成史と構造分析を中心に——

張江洋直・池田裕子・安藤友晴

● 要約

現在、図書館学は図書館情報学への転換が続いている。この転換が求めるのは図書館員の能力向上でもあり、それがその養成課程における学習内容の高度化をもたらしている。こうしたなかで、情報化やデジタル化が進めばすすむほど、逆に、そのアナログ的価値が高まる分野が「児童サービス」といえよう。本稿は、図書館情報学課程の必修科目である「児童サービス論」の今後の発展を企図し、その今日的課題 児童サービス業務に関わる具体的なものというよりは、むしろより学問的な課題に応え得る内容を模索するものである。その際の共通したキーワードは「読み聞かせ」である。

第1章では、デジタル化の進展に伴い「読み聞かせ」を含む「児童サービス」がどのように変容し得るのかを検討する。第2章では、「読み聞かせ」を学問的課題とする際の新たな論点を探る。第3章では、「児童サービス」の本質に関わる前提条件の解明への一助として「読み聞かせ」の生成を近代日本の文化史として捉える際の論点を示す。最後の第4章では、「読み聞かせ」という場 でどのような出来事が生起しているのかを構造的に分析する。

● キーワード

児童サービス
読み聞かせ
近代文化史
標準語
絵本
教育史
構成現象学
志向性分析
図書館情報学
電子図書館
教育工学
デジタル教科書
場所としての図書館
ラーニング・コモンズ